

資料

医療型療養病床看護師の終末期看護に対する態度
－終末期看護に対する不安の有無別にみた特徴－高原和恵*¹ 竹田恵子*²

1. はじめに

人生の最終章を生きる高齢者にとって死は身近な存在であり、高齢者の終末期看護に携わる看護師には、死と向き合いながら過ごす高齢者を支える一員としての役割が求められる。高齢者によりよい看護を提供するには、高齢者の死生観を把握し尊重することが重要であり、そのためには、看護師自身も死生観を持ち、自己がどのような死生観を持っているのか把握しておくことが必要である。一般的に看護師の死生観は、あらゆる看護の場面に反映されると言われているが、死生観と終末期看護に対する態度との関連に焦点を当てた研究は、一般病床や特別養護老人ホームの看護師を対象にしたものがあるものの未だ数が少ない^{1,3)}。日比²⁾は、死への恐怖・不安の低い看護師は、死にゆく患者へのケアに対し前向きであったと報告している。また、岡本⁴⁾は看護師が死への恐怖を抱くことは、死が間近の患者からの逃避につながり、患者に向き合い最期の時を支えるケアを行うことができなくなると指摘していることから、看護師の死生観は、終末期看護に対する積極性などの態度に反映され、看護の質に影響すると考えられる。川合ら⁵⁾は、終末期看護を行っている約8割もの看護師が「死に対する恐怖がある」と報告しており、看護師が死生観を育むこと（死の準備教育）は重要な課題であると考えられる。

近年、高齢者が終末期を過ごし最期を迎える場は多様化しており、その一つに医療型療養病床がある。医療型療養病床では、急性期の治療が終了した後も継続した治療を必要とする高齢患者が、一般病床から転院、転床している。平成17年から22年に行われた調査によると、医療型療養病床における医療区分は、2と3の占める割合が年々増加しており医療の必要性が高くなっている^{6,7)}。また平成21年の調査では、

医療型療養病床の平均入院日数は約280日と長く死亡退院が退院全体の約3割を占めており⁸⁾、医療型療養病床は高齢者の終末期看護の場として重要な場であると考えられる。そのため医療型療養病床の終末期看護の質を向上させることは喫緊の課題であると考えられるが、終末期看護の現状を明らかにした研究は少ない。

そこで本研究では、看護師に対する死の準備教育のあり方を検討する基礎資料を得ることをねらいに、医療型療養病床看護師の終末期看護に対する態度の特徴を、死が間近の患者の看護に対する不安の有無別に明らかにしたいと考えた。

2. 研究方法

A 県の終末期看護を行っている医療型療養病床68施設に勤務する看護師995名を対象に、郵送法による無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、基本属性の年齢、性別、看護師としての経験年数の他、終末期看護への関心、終末期看護の経験、自分の行う終末期看護への満足、誰かと生や死の話をする機会、亡くなられた方へのケアの振り返りをする機会、死が間近の患者の看護に対する不安の有無および終末期看護に対する態度であった。なお、終末期看護に対する態度については、中井らの医療者のターミナルケア態度尺度日本語版 (FATCOD-Form B-J)⁹⁾を用いた。この尺度は本来3因子からなっているが、本調査では、わが国で使用を奨励されている「死にゆく患者へのケアの前向きさ」と「患者・家族を中心としたケアの認識」の2因子を使用することとした。分析は、死が間近の患者の看護に対する不安（以下、終末期看護に対する不安とする）の有無別に2群を設定し、比較検討した。質的変数の独立性の検定は χ^2 検定を、平均値の差の検定にはt

*1 元川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健看護学専攻

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科

(連絡先) 竹田恵子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: takeda@mw.kawasaki-m.ac.jp

検定を行った。この際、無回答であったものについては分析から除外した。統計解析には、SPSS18.0J for Windows を用いた。調査期間は、2011年6月～2011年9月であった。

3. 倫理的配慮

各施設の看護管理者に調査の目的と方法、倫理的配慮について文書及び口頭で説明をした。同意が得られた施設の看護師に対しては、調査への協力は自由意思を尊重し、協力の有無により不利益を被ることはないこと、調査は無記名で行うこと、返信をもって同意を得たこととすること、データの管理は厳重に行うこと、個人情報秘密厳守されること、結果を学術的な場で公表すること等について、文書にて説明をした。本調査は、川崎医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号253）。

4. 結果

995部の調査票を配布し689名から回答を得た（回収率69.2%）。このうち年齢が無回答であったものと尺度の項目に重複回答や無回答のあったものを除いた結果、有効回答は600名（有効回答率87.1%）であったが、性による影響を考慮して男性10名を除外し、女性に限定して分析をすることとした。また、終末期看護に対する不安の有無別に特徴を検討するため、「終末期看護に対する不安の有無」に対しどちらでもないと回答した224名を除外した結果、分析対象は376名となった。

4.1.1 対象者の属性

終末期看護に対して「不安あり（以下、不安あり群）」は195名（51.9%）、「不安なし（以下、不安なし群）」は、181名（48.1%）であった。

終末期看護に対する不安の有無別にみた対象者の属性を表1に示した。対象者の属性では、年齢と看護師としての経験年数で2群間に有意差がみられた（ $p<0.01$ ）。年齢は50歳代が全体の33.0%であっ

た。不安あり群では多い順に、50歳代、40歳代、30歳代であり、30歳代から50歳代で80.5%を占めた。

一方、不安なし群は、多い順に50歳代、40歳代、60歳以上と続き、40歳代から60歳以上で80.6%を占めた。看護師としての経験年数は、全体では10年以上が76.9%であったが、不安あり群は67.1%、不安なし群は87.3%であった。

4.1.2 対象者の背景

終末期看護に対する不安の有無別にみた対象者の背景を表2に示した。対象者の背景では、終末期看護の経験、自分の行う終末期看護への満足、誰かと生や死の話をする機会等で2群間に有意差がみられた（ $p<0.01$ ）。「終末期看護の経験」では、「非常にたくさんある」または「たくさんある」と回答した者が、不安あり群が48.7%であったのに対し、不安なし群は72.4%であった。「自分の行う終末期看護への満足」では、不安あり群では「満足していない」が49.2%と最も多かったのに対し、不安なし群では「満足している」が32.6%と「どちらとも言えない」について多かった。「誰かと生や死について話をする機会」は、「時々ある」が両群ともに最も多く、不安あり群で55.4%、不安なし群で53.6%であった。しかし、不安あり群では、26.2%が「あまりない」と回答したのに対し、不安なし群では21.5%が「よくある」と回答していた。また、「終末期看護への関心」では、両群共に「関心がある」が最も多く、不安あり群が69.2%、不安なし群が65.8%であった。「亡くなられた方のケアの振り返りをする機会」は、両群ともに「時々ある」が最も多く、不安あり群で52.4%であったのに対し、不安なし群では48.7%であった。また、「よくある」と回答した者はそれぞれ13.8%、19.9%であった。

4.2 終末期看護に対する態度

終末期看護に対する不安の有無別にみたFATCOD-Form B-J得点を表3に示した。「死にゆく患者へのケアの前向きさ」は、不安あり群が 56.8 ± 6.0 点、不

表1 対象者の属性

		全体 n=376	不安あり群 n=195	不安なし群 n=181	χ^2 検定
年齢	20歳代	36 (9.6)	32 (16.4)	4 (2.2)	p<0.01
	30歳代	73 (19.4)	42 (21.5)	31 (17.1)	
	40歳代	104 (27.7)	51 (26.2)	53 (29.3)	
	50歳代	124 (33.0)	64 (32.8)	60 (33.1)	
	60歳以上	39 (10.4)	6 (3.1)	33 (18.2)	
看護師としての 経験年数	5年未満	29 (7.7)	23 (11.8)	6 (3.3)	p<0.01
	10年未満	50 (13.3)	37 (19.0)	13 (7.2)	
	10年以上	289 (76.9)	131 (67.1)	158 (87.3)	
	無回答	8 (2.1)	4 (2.1)	4 (2.2)	

()内はnに対する% 検定は無回答を除いて算出

表2 対象者の背景

		全体 n=376	不安あり群 n=195	不安なし群 n=181	χ^2 検定
終末期看護への 関心	関心がある	254 (67.5)	135 (69.2)	119 (65.8)	n.s
	どちらとも言えない	103 (27.4)	51 (26.2)	52 (28.7)	
	関心がない	19 (5.1)	9 (4.6)	10 (5.5)	
終末期看護の経験	非常にたくさんある	77 (20.5)	24 (12.3)	53 (29.3)	p<0.01
	たくさんある	149 (39.6)	71 (36.4)	78 (43.1)	
	まあまあある	121 (32.2)	79 (40.5)	42 (23.2)	
	ほとんどない	26 (6.9)	20 (10.3)	6 (3.3)	
	無回答	3 (0.8)	1 (0.5)	2 (1.1)	
自分の行う終末期 看護への満足	満足している	83 (22.1)	24 (12.3)	59 (32.6)	p<0.01
	どちらとも言えない	148 (39.4)	75 (38.5)	73 (40.3)	
	満足していない	143 (38.0)	96 (49.2)	47 (26.0)	
	無回答	2 (0.5)	0 (0.0)	2 (1.1)	
誰かと生や死の 話をする機会	よくある	55 (14.6)	16 (8.2)	39 (21.5)	p<0.01
	時々ある	205 (54.5)	108 (55.4)	97 (53.6)	
	どちらとも言えない	24 (6.4)	16 (8.2)	8 (4.4)	
	あまりない	77 (20.5)	51 (26.2)	26 (14.4)	
	ない	10 (2.7)	3 (1.5)	7 (3.9)	
	無回答	5 (1.3)	1 (0.5)	4 (2.2)	
亡くなられた方の ケアの振り返りを する機会	よくある	63 (16.8)	27 (13.8)	36 (19.9)	n. s
	時々ある	190 (50.4)	102 (52.4)	88 (48.7)	
	どちらとも言えない	27 (7.2)	15 (7.7)	12 (6.6)	
	あまりない	80 (21.3)	45 (23.1)	35 (19.3)	
	ない	9 (2.4)	3 (1.5)	6 (3.3)	
	無回答	7 (1.9)	3 (1.5)	4 (2.2)	

()内はnに対する% 検定は無回答を除いて算出

表3 終末期看護に対する不安の有無別にみた FATCOD-Form B-J 得点の比較 t 検定

因子の得点配置	全体	不安あり群	不安なし群	t値	
死にゆく患者への ケアの前向きさ	16.0~80.0	58.4±6.5	56.8±6.0	62.1±6.5	-8.277**
患者・家族を中心 とするケアの認識	13.0~65.0	49.5±4.8	49.5±4.6	50.6±4.6	-2.191*
平均点±標準偏差				**p<0.01 *p<0.05	

不安なし群が62.1±6.5点で、2群間に有意差がみられた (p<0.01)。「患者・家族を中心とするケアの認識」においても、不安あり群が49.5±4.6点、不安なし群が50.6±4.6点で、2群間に有意差がみられた (p<0.05)。

5. 考察

5.1 対象者の概要

本研究の対象者は、年齢では、不安あり群が不安なし群に比して年齢層が若いものの、両群共に50歳代を中心とする看護師であった。また、看護師としての経験年数においても、不安あり群に比べ不安なし群の方が経験年数の長い人がやや多かったが、両群共に10年以上の看護師が最多であった。遠山

ら¹⁰⁾の療養病床の看護師を対象とした調査では、平均年齢が42.8歳、看護師経験が現在働いている療養病床で平均5年、それ以外で13.6年であった。本調査の対象者は、この結果と類似していた。また、不安あり群、不安なし群ともに約7割の看護師が終末期看護への関心を持っていたことから、両群共に、看護師経験が長く、終末期看護への関心をもつ看護師が多いという特徴を有する集団といえる。

しかし、終末期看護の経験がたくさんあると認識している看護師は不安あり群よりも不安なし群に多く、自らの行った終末期看護に対して満足している看護師の割合も不安あり群よりも不安なし群の方が多いことから、「終末期看護の経験」や「自分の行う終末期看護への満足」においては、不安あり群と

不安なし群で異なる特徴を有していることが明らかになった。

5.2 終末期看護に対する態度の特徴

本調査において、終末期看護への積極性に関する項目である「死にゆく患者へのケアの前向きさ」は、不安なし群の方が不安あり群に比して有意に得点が高かった。前述の如く、本調査対象は不安なし群の方が不安あり群よりも終末期看護の経験がたくさんある者が多く、また終末期看護に対して満足しているものが多かったことから、本調査結果は、看取った患者数が多く、看取りの満足感を持っている方が死にゆく患者へのケアに前向きであったという大町ら¹⁾の報告に一致していた。しかし、本調査結果を一般病棟や訪問看護の看護師を対象とした先行研究¹¹⁾や経験年数10年以上の看護師を対象とした川合ら⁵⁾の研究結果と比較すると、全ての先行研究より不安あり群の方が得点が低く、不安なし群の方が得点が高かった。これらのことから、終末期看護に対する不安の有無は、終末期看護に対する積極性に影響することが推察された。

一方、「患者・家族を中心とするケアの認識」では、不安あり群に比べて不安なし群の得点が有意に高く、不安なし群の方が患者と家族を中心とするケアを志向していることが示された。本調査結果を先行研究¹¹⁾と比較すると、不安あり群、不安なし群ともに先行研究の結果よりも得点が低かった。

以上の結果より、不安あり群は、終末期看護への関心を持っているが、死にゆく患者への看護に対し前向きになれず、自分の行った看護に対しても満足感を得られにくいことが推察された。上述の如く、終末期看護への不安がケアの積極性に影響している可能性が示唆されたことから、医療型療養病床の看護師が終末期看護に対してどのような不安を感じているのかを明らかにしていくことが今後の課題と考

えられた。

一方、不安なし群は、終末期看護の経験が多いと感じており、死にゆく患者への看護に対し前向きであり、自分の行った看護に対して満足感を得ている看護師が多かった。しかし、患者と家族を中心とするケアの認識は先行研究¹¹⁾の看護師と比べ高いとは言えず、死の準備教育の鍵となる「誰かと生や死について話をする機会」や「亡くなられた方のケアの振り返りをする機会」が「よくある」と認識している看護師は2割前後であった。以上のことから、医療型療養病床の終末期看護の質を向上させるためには、終末期看護に不安のある看護師だけでなく、不安のない看護師においても、自己の死生観を育み続けられるように死の準備教育の機会を増やすと共にその内容を充実させていくことが課題であると考えた。

A県の医療型療養病床で働く看護師の終末期看護に対する態度は、終末期看護に対する不安の有無によってそれぞれ異なる特徴があったことから、その特徴に応じた「死の準備教育」のあり方の検討が求められることが示唆された。

結 論

本調査において、不安あり群に比べて不安なし群の方が死が間近の患者の看護に対し積極的であり、不安あり群に比べて不安なし群の方が患者と家族を中心とするケアを志向していた。これらのことから医療型療養病床の看護師の終末期看護に対する態度は、死が間近の患者の看護に対する不安の程度によって異なる特徴がみられることが明らかとなった。

謝 辞

本研究の調査にあたり、ご協力頂きました皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 大町いづみ, 横山誠一, 水浦千沙, 山下友紀, 磯部佳苗, 山口知香: 一般病院勤務のターミナルケア態度に関連する要因の分析. 保健学研究, 21(2), 43-50, 2009.
- 2) 日比かおり, 新野直明: ターミナルケアに関わる看護師の死生観と看護ケア態度の関係. <http://www.obirin.ac.jp/>, (2013年9月7日検索)
- 3) 白岩千恵子: 特別養護老人ホーム看護職者の死生観と終末期ケア. 川崎医療福祉大学大学院 保健看護学専攻 平成22年度修士論文
- 4) 岡本双美子, 石井京子: 看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因の分析. 日本看護研究学会雑誌, 28(4), 53-60, 2005.
- 5) 川合理恵, 中西真由美: 看護師の背景とターミナルケア態度尺度 FATCD-B-J との関係. 第39回看護総合, 389-391, 2008.
- 6) 厚生労働省 厚生労働統計一覧: 「医療施設介護施設の利用者に対する横断調査」速報値【介護療養病床関連部分抜粋】平成22年6月23日調査.

- <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000r4qh-img/2r985200000r4va.pdf#search>,
(2011年8月10日検索)
- 7) 厚生労働省：療養病床に係る診療報酬・介護報酬の見直しについて 平成18年4月. <http://www.mhlw.go.jp/bunya/shakaihoshoh/iryouseido01/ryouyou02.html>, (2013年11月6日検索)
 - 8) 慢性期医療協会「アンケート集計・調査報告」：医療保険療養病床調査概要報告 入退院経路調査. (平成21年4月1日～9月30日)
<http://www.jamcf.jp/enquete.html>, (2011年8月10日検索)
 - 9) 宮下光令：Frommelt の医療者のターミナルケア態度尺度日本語版 (FATCOD-FormB-J) 緩和ケア10月増刊号, 18 (Suppl), 107-110, 2008.
 - 10) 遠山幸子, 新田静江：療養病床勤務看護師による終末期にある患者の家族に対する支援実態. *Yamanashi Nursing Journal*, 10(2), 13-18, 2012.
 - 11) 横尾誠一, 吉原麻由美, 松島由美, 大町いづみ：訪問看護師のターミナルケア態度に関連する要因の分析 一般病院看護師との比較. *保健学研究*, 22(2), 37-43, 2010.

(平成25年12月20日受理)

Attitudes of Nurses to Terminal Care for Patients at Skilled Nursing Facilities
– The Aspect of the Presence or Absence of Anxiety in Terminal Care –

Kazue TAKAHARA and Keiko TAKEDA

(Accepted Dec. 20, 2013)

Key words : terminal care, attitude, death education, view of life-and-death, skilled nursing facilities

Correspondence to : Keiko TAKEDA

Department of Nursing

Faculty of Medical and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : takeda@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.23, No.2, 2014 285 – 290)